

鈴木 珠里



フォルグ・ファツ
ロフザード (Ferozāh
Farokhzād, 一九三五
―一六七年) は、イラン
を代表する現代詩人で
あり、長いペルシア文

学史上初めて女性の個人的な経験を詩にして公
に発表した女性であった。またハンセン病患者
の療養所をテーマにしたドキュメンタリー短編
映画『あの家は黒い』(二〇〇二年)『ブラック・
ハウス』のタイトルで山形国際映画祭にて日本
初上映)の監督としても有名である。

フォルグが一九六七年にこの世を去ってか
ら半世紀以上経つが、いまだに彼女の詩はイラ
ンの人々の間で親しまれ、その人氣が衰えるこ
とはない。それどころか、二〇二〇年二月コロ
ナ禍において、彼女の詩に詠われる孤独感、閉
塞感、絶望、再生への希望に、あるいは彼女の
映画に映し出されたハンセン病患者への謂れな
き偏見と差別に、何らかの共感を覚えた人が少

なからずいたようだ。連日新型コロナウイルス
に関するニュースで埋め尽くされた新聞の片隅
に、時折この詩人の名前を目にすることがあつ
た。たとえば「映画『あの家は黒い』が示唆す
ること」「今こそ愛する人に送りたい本厳選4
冊」といったコラムが日刊紙ハムシャフリー紙
オンライン版に掲載された。おそらくはステイ
ホームで読書や自身を見つめる時間が増えたこ
とが影響したと思われる。特に、今回翻訳した
「寒い季節の訪れを信じよう」(imān biyāvarim be
āghāz-e fāst-e sard)の最初の連、「寒い季節の
始まりに／大地は汚染された存在を感じ始め／
大空は純粹で悲壮な絶望を持ち始め／そしてこ
のセメントでできた手は無力なまま」という描
写は、半世紀以上前に詠まれたとは思えないほ
ど現在の私たちが直面している状況と合致し、
改めてフォルグの表現力に感服せざるを得な
い。『中東現代文学選2021』の刊行に当たり、
私がこの詩を選んだ理由は一つ、今こそ呼びか
けたいからであった。「寒い季節の訪れを信じ
よう」と。

フォルグ・ファツロフザードは一九三五年
にテヘランの中流家庭に生まれた。元軍人で教
育熱心だった父親の教育のもと、六人の兄弟姉
妹とともに多感な幼年期を過ごし、中学に入る
頃にはすでに詩作を始めた。十六歳で母方の親
戚パルヴィーズ・シャープール(一九二四―

二〇〇年)と出会い電撃的な恋愛結婚をする
が、パルヴィーズとの年齢差が十一歳もあった
こと、パルヴィーズが定職に就いていなかった
ことなどを理由に家族からは大反対された。結
婚後パルヴィーズが石油関連の仕事に就き、石
油都市アフワーズに移住し新しい生活を始める
が、フォルグはアフワーズにいる間も文学活
動を続け、それから間もなく第一詩集『囚わ
れ人 (Asir)』を発表した。この詩集は、文学
研究者シヨジャーウッティーン・シャファア
(一九一八―二〇二〇年)の序文にあるように
「感性の力強さ、言葉の自然さ、感情表現にお
ける誠実さ、そして内的な躍動感において非常
に価値がある」と高い評価を受ける反面、女性
としての個人的感情や恋愛関係(相手が夫とは
限らなかった)の描写が、当時のイラン社会に
おいてはそれ自体が非難の対象にもなった。特
に自分の家族からの非難はフォルグを精神的
に追い詰めていった。また文壇における複数の
男性との交際の噂も後を絶たないことから夫と
の関係も壊れ、鬱状態に陥ったフォルグの方
から離婚を切り出すに至った。その時、二人の
間には幼い息子が一人いたが、自分のいる環境
は子育てに適さないと判断したフォルグは息
子を夫と彼の家族に託すことを決意した。しか
し離婚後もフォルグの精神状態が改善される
ことはなく、自殺未遂を繰り返した末にようや

く回復の兆しが見えたのは、療養を目的にイタリアへ長期旅行に出たときであった。帰国後、雑誌『フェルドゥスイー』でイタリア旅行記「異国」(『Dur dh'aire digan』)を掲載(『中東現代文学選2012』に抄訳所収)、また第二詩集『壁(Divân)』、第三詩集『反逆('osriân)』を次々に出版した。この二つの詩集では、妻として家庭に閉じ込められた閉塞感・反抗心・孤独感、女性としての愛の喜びと苦しみ、母親としての離別した子供への思慕や自責の念などが情感豊かで繊細な言葉によって語られ、詩人としての成長を見せている。

さらにフォルグが詩人として大きく成長するきっかけとなったのが、作家で映画監督のエブラヒム・ゴレスターン(一九二二年)との出会いであった。フォルグは当初ゴレスターンが経営する映画製作会社のタイプストとして採用されたが、彼女の豊かな感性をいち早く見抜いたゴレスターンは、彼女を映画製作部門へ移し映画製作のノウハウを伝授した。またフォルグもゴレスターンから映画製作を学ぶばかりでなく、彼を通じて多くの文学者や芸術家、知識人たちと交流し、自身の感性と思考を高めていった。一九六二年秋、ハンセン病患者の支援団体からこの病気の啓蒙を目的とした映画製作を依頼され、ゴレスターンは監督にフォルグを指名した。フォルグと三人の撮影ス

タッフは二週間近くこの療養所に滞在し、患者たちと過ごし交流する中で、彼らの外見的な醜さの向こうにある人間の本質的な姿を、詩情豊かに撮影することに成功した。その結果生まれたのが、映画『あの家は黒い(Khane s'wah ast)』であった。この映画は国内外で大きな反響を呼び、フォルグは翌六三年、旧西ドイツのオーバーハウゼン国際短編映画祭で最優秀賞を受賞した。また六六年にはイタリアのペーザ口映画祭に招待され、世界的に有名な映画監督と交流し、国際的な監督デビューを果たした。

一方、文学活動においても詩人としての円熟期に入り、六四年に出版された第四詩集『新たな生(Tavalloti digan)』では、伝統的な古典詩の形式に縛られず口語に近い韻律を用いた新しいリズムを積極的に詩に取り込んだ。内容の面でも、個人的な感情の吐露に留まらず、内観や沈思、哲学的人間の本質、社会的閉塞感、社会風刺などテーマに広がり深さが加わった。翌六五年、雑誌『アーラシュ』に長編詩「寒い季節の訪れを信じよう」他七編の作品を発表し、高い評価を受けた。

映画監督・詩人として成功の道を歩み始めていたフォルグであったが、実生活では決して精神的安定を手に入れることはなかった。公私ともに固い絆で結ばれたゴレスターンには妻子がいたため、世間的には常にフォルグたちは

非難的となり、温かい家庭とは無縁の孤独な生活を送っていた。またドイツ留学中の弟への金銭的支援などを行っていたため経済的にも決して裕福な状態ではなく、精神的には常に不安定な状態にあった。そして六七年二月十三日午後四時三〇分、自ら運転するジープの運転操作を誤り車から投げ出され病院に運ばれたが、意識が戻ることはなかった。享年三二。あまりにも若くあまりにも突然にこの世を去った詩人の訃報はその日のうちにイラン全土に伝わり、二日後の葬儀には多くの文学者、芸術家、知識人が集まり、多くの詩人が彼女の死を悼み挽歌を詠んだ。最後の詩集『寒い季節の訪れを信じよう』は、雑誌『アーラシュ』に掲載された八編の詩の他に、彼女の死を悼む詩人たちの挽歌が収録され、その死から七年後の七四年に出版された。

寒い季節の始まりに佇む女性の孤独で絶望的な描写から始まるこの詩は、二五五行に及び、フォルグの作品の中で最も長い詩であり、音楽性、詩的イメージ、詩的テーマにおいてイラン現代詩における傑作の一つと見なされている。

この作品のテーマとなっている「孤独」は、フォルグの人生そのものでもあった。わずか十六歳で結婚するまでの少女時代を除けば、彼

女は常に「孤独」と隣り合わせて生きてきた。それは公私ともにパートナーとなったゴレスターンと知り合つて以降も——二人の強い個性は、互いを高めあうこともあれば同じぐらい傷つけあうこともあった——同様であった。第四詩集『新たなる生』の冒頭の詩の最終連と、第五詩集『寒い季節の…』冒頭の詩の最初の連では、「孤独の女」という言葉が用いられ、彼女の詩的テーマの連続性を示している。

それから、頬にゼラニウムの花びらで
紅をさした少女は、ああ

今は孤独の女に
今は孤独の女に

(『新たなる生』より)

そしてこれが私

孤独の女

寒い季節の入り口で

大地は汚染された存在を感じ始め

大空は純粋で悲壮な絶望を持ち始め

そしてこのセメントでできた手は無力なまま

(『寒い季節の…』より)

ではこの孤独な詩人が「たった一人の友」と呼びかける相手は誰なのか。最初のうちは濡れた木々の間を通る「男」、つまりフォルグの

恋人——「友」を意味する^レ友は「恋人」の意

味もある——を連想させるが、さらに詩を読み進めていくと、少なくともフォルグの経歴を知る者であれば、新婚初夜の破瓜を思わせる表現によつてこの「男」がフォルグの最初の理解者であった元夫であることに気づくだろう。

そしてそこで読み手は、この「たった一人の友」も結局は彼女の呼びかけに応えることなく去っていくことを察するのである。実際、詩の後半部分で彼は「時間という車輪の下で／潰され」てしまい、その後、フォルグが語り掛ける相手は、「男」ではなく「孤独という異郷の感覚」へと変わる。そしてこの孤独に自身の部屋を引き渡す——孤独を敢えて受け入れる——ことを表明する。

こんにちは、ねえ孤独という異郷の感覚よ
あなたにこの部屋を引き渡そう

だって黒い雲はいつも

浄化という新しい教えを伝えるものだから

フォルグが孤独の中で見出したのは、絶望

ではなく、再生への希望であった。第四詩集の表題でもある「新たなる生」の最終連でも自身を孤独な海に住む「小さな妖精」にたとえ、こう語っている。

わたしは

悲しそうな ちいさな妖精を している

その子は 大海の中に住んでいて

その心を 木製の牧笛で

奏でているのだ やさしく やさしく

悲しそうな ちいさな妖精は

夜に キスをひとつさされて死んでしまう

そして明け方 またひとつキスをされて

再び 生まれてくるのだ

本作「寒い季節…」の中でも、雪や嵐の前兆である黒い雲を敢えて認めることこそ浄化という再生——新たなる生——へとつながることを彼女は知っているのだ。さらに彼女は「理想の庭」という未来について語り、呼び掛ける。

信じよう

寒い季節の訪れを信じよう

想像の庭たちの荒廃を信じよう

逆さまになった役立たずの鎌を信じよう

囚われの身の種たちを信じよう

この「想像の庭」では、芽を刈り取るはずの鎌は役に立たず、新しく芽吹く若い二本の手——真実を掴む未来への希望——が摘み取られることもないと訴える。そして最終連、やがて訪れる春と「若い手」の再生を確信し、再び訴え

る。誰に？

どんな雪が降っているのか見てごらん
おそろく真実とは ああ若い二本の手だった
それはひっきりなしに降る雪の下に埋葬され
そして次の春が来ると

窓越しに見えるあの空と床を共にするのだ
自由になった緑色の茎が噴水のように
芽吹くだろう ねえ友よ、たった一人の友よ
寒い季節の訪れを信じよう

そしてようやく私たちは気づくのである。「寒い季節の訪れを信じよう」と語り掛けられている「たった一人の友」は、この長い詩を最終連まで読み、今フォルグの魂に最も近いところにいる私たち自身である、ということ。そして私たちは自身の胸に刻むのだ。この寒い季節を受け入れること、このひどい状況から目を逸らさず真摯に受け入れることが、次の「新たな生」につながる一筋の光なのだ、ということ。